

序

調剤報酬は、薬局で働く人にとって身近でありながら、決してわかりやすいものではありません。点数、施設基準、算定要件、疑義解釈、レセプト摘要欄への記載……。日々の業務の中で必要に迫られて確認しているものの、算定できるかどうかを判断すること自体が難しい場合も多く、「なぜこの点数があるのか」「何を評価しているのか」まで考える機会は、意外と少ないのではないのでしょうか。

しかし、調剤報酬は単に点数をまとめただけのものではありません。調剤報酬には、薬局や薬剤師にどのような役割が求められているのか、これからの薬局がどの方向に進むべきなのかといった、国が薬剤師・薬局に期待する姿が示されています。調剤報酬を読み解くことは、単に算定要件を確認するだけでなく、薬局業務の意味を見直すことにもつながります。

令和8年度調剤報酬改定では、立地ではなく機能で評価される薬局をめざす流れの中で、いわゆる門前薬局、特に都市部や医療モールに立地する薬局には厳しい見直しが行われました。一方で、かかりつけ薬剤師に関する評価体系の見直し、継続的服薬指導の評価、残薬調整や有害事象の防止、在宅医療、医薬品供給不安への対応、薬剤レビューの評価など、薬剤師による対人業務や薬局の地域機能の評価する内容も多く盛り込まれました。令和8年度改定は、薬局の役割が、患者さんの薬物療法や地域の医薬品供給を支える方向へ広がっていることを示す改定だと受け止めています。

本書では、令和8年度改定を踏まえた調剤報酬について、算定のポイントと根拠をできるだけ現場目線で整理しました。通知や疑義解釈に基づく要件を確認しながら、単に「算定できる」「算定できない」を覚えるのではなく、各点数がどのような薬局業務を評価しているのか、実務の中でどのように考えればよいのかを意識して解説しています。

はじめて調剤報酬を学ぶ方には、全体像をつかみ、専門用語を学び、実際に算定を行うまでの道しるべとなるように、すでに実務で算定にかかわっている方には、日々の業務の中で確認を行うためのツールとして活用でき、さらに将来を見据えてどのように行動していけばよいのかを考えるきっかけとなるように、できるだけ実務に近い言葉で、必要な情報を整理することを心がけました。

また、本書では算定要件の整理だけでなく、各項目の背景や、私自身が現場でどのように受け止めているのかについても、できるだけ言葉にするよう心がけました。調剤報酬を学ぶ目的は、点数を取ることだけではありません。点数の背景にある意味を理解することで、自分の薬局では何に取り組めるのか、患者さんが困っているときに薬剤師としてどのような形でかかわることができるのかを考える手がかりになります。制度や点数の意味を理解していれば、患者さんに必要な薬学的管理を行い、その内容を記録し、必要に応じて医療機関等へ情報をつなぎ、実際に行った取り組みを薬剤師の専門性として適切な評価へ結びつけることができます。

一つひとつの薬学的管理や服薬指導、情報提供は、単なる算定項目ではなく、患者さんや医療従事者とのコミュニケーションの機会でもあります。そうしたかかわりの積み重ねが、信頼関係を築く土台になるはずです。本書が、薬局で働く皆さまにとって、調剤報酬を少しでも前向きに、そして実務に結びつけて考える助けになればうれしく思います。

最後に、本書の企画から編集、制作に携わってくださった秋本佳子さま、望月恭彰さまをはじめとする羊土社編集部の皆さま、日々の業務を通じて多くの気づきを与えてくださる薬剤師・医療関係者の皆さま、そして「ぺんぎん薬剤師」の発信を読んでくださっている皆さまに、心より感謝申し上げます。

2026年9月

ぺんぎん薬剤師